

学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会（第80回）における主な意見

フロンティア事業の進捗評価について

進捗評価の実施というのは、ファンディングエージェンシーとしてはモニターする役目があるが、一方で実施主体としては絶好の点検の場。むしろその評価というのが自分の問題を本当に明らかにして、もし問題があれば、それを是正する絶好の機会。「アルマ」の関係でも、国際的に、やはり毎年評価委員会をやっていて、そこではマネジメントのプロフェッショナルの方が何人も入って、NSFなど、ファンディングエージェンシーからも来て、財政状況から、もちろん学術的な問題から全部チェックをし、それでやはりうまくいっているということ自分たちが、そのプロジェクトが見せていくと、それが国際標準になっているのではないかと思われる。

それぞれのプロジェクトごとに、評価委員会など自己評価を実施しているはずなので、例えば国際評価委員会を作って毎年自己評価を行ったものを作業部会に提出してもらうようなことがあってもいいのではないか。

科研費でもそうしなければいけないので、当然ながら、これだけの金額のものであればそういうことはあり得る。だから実際何年かに1回としても、毎年の評価というのを出していただく、しかも自己評価ではなくて、外部に委託して、それをこちらに書面で出していただくということは当然あり得るのではないか。今までよりもより一歩進んだ、厳格な評価というのはやはり必要になってくるかと思われる。次回以降、早い時点でそういうことは議論したい。

次期ロードマップの対象範囲等

前回（RM2017）から学術会議マスタープランのヒアリング対象計画を全て作業部会でも対象とするというふうに変えられたが、それを継承するかどうか。

何をもって先行あるいは後継、新規計画とするか。

次期ロードマップの策定に際しての評価

予算はここ数年同額、微減という傾向の中、今後も急に増えるということは想定しにくいとなると、現行のプロジェクトがあるので、新しいものは何かが終わらないと入れないため、厳しく評価をし、厳選して選んで、着実に将来必要なものを支援していくという、柴山イニシアティブにあるように厳選な評価と支援を本作業部会で具現化したい。

資料の評価、査読は、書き手は私たちが一番というふうに書いてくるが、海外は1か月ごとにどんどん大きなデータが出てきて、それこそ論文を100ぐらい読み込まないと本当の真偽は分からないような分野があるので、例えば事前に、プロフェッショナルなところに委託をして、動向を調べてもらうことも有用。

学術会議のマスタープランというのは、それぞれの分野をやはりエンカレッジするというのが根底にあると思う。いろいろな分野でそれぞれいいものをどんどん頑張ってもらうためにやっているという考え方がどうしてもあって、それはそれでももちろん重要だが、やはり作業部会の立場は違い、こちらは、特に日本が国際的に勝れている分野はもうちょっと投資してそれを伸ばすという、限られた財源の中ではそうやらざるを得ないので、その観点はきちんとやらないといけない。本当に日本のその分野の国際的なレベルというのが何らか反映されるような指標を見付ける努力も必要で、分野によって、共通の指標が簡単に見付かるとは思わないが、日本のその分野の国際的なレベルというのが何らか反映されるような指標を見付ける努力を我々はしなければいけない。参考人の方を呼ぶのもいいが、国際的な位置付けというのは、我々違う分野の人から見るとやはり分からないので、そこは何か今後考えていかなければいけない。